

古明地さん家の執事さん

シノグ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

地底を彷徨っていたところを古明地さとりに拾われた記憶喪失の人間。

人間はさとりに「蒼輝」という名前をもらい執事となる。

これは、人間の執事と悟り妖怪の普通の日常のお話。

目次

いつもの朝

「蒼輝^{そうき}。おはよう」

「はい。おはようございませうさとり様」

朝ごはんの支度をしながらさとり様と挨拶を交わす。

さとり様は早朝でもキリツとしている……ように見えて寝癖がある。さとり様はちよつとだけ抜けているのが可愛いところだ。

地霊殿の朝は早い。

まず最初に執事である僕が起きる。その後さとり様、お空とお燐、そして最後にこいし様だ。

僕はみんなが起きてくる前に食事の準備を済ませなくてはならない。朝ごはんを食べたその後には人形ひとがたになれないペット達の餌やり、炊事洗濯を済ませる。もはや執事というより家政婦の方が近い。

「蒼輝くんおっは〜」

「おっは〜」

「うん。おっは〜」

「こら、お空もお燐もちゃんと挨拶しなさい。蒼輝ものらない」

「はーい」

「はい。申し訳ありません」

お空とお燐が目を擦りながら食卓につく。地霊殿では主もペットも関係なく、みんなでご飯を食べるのがルールだ。さとり様は僕たちを従者としてではなく家族として接してくださる。とても寛大な方だ。

「よし、ご飯出来ましたよ」

「うにゅー、眠いー」

お空はふらふらと立ち上がり、お盆を運ぼうとしてくれる。眠たきや座つてりゃいいのに、律儀な子だ。流石さとり様のペットだ。まあ、お燐は机に突つ伏してるけど、お燐も普段はいい子だからこのくらいはね。

「おっはよー！ー」

「こいし、遅いわよ。早く食卓に着きなさい」

「はーん」

こいし様が元気にドアを開け、さとり様の注意を聞きながらも僕に抱きついてくる。お盆を落としそうになるが、これぐらい受け止めなくては執事の名が廃るといふものだ。

こいし様は嬉しそうに顔を僕のお腹に擦り付ける。最近のこいし様は僕を見つけるとこのように顔を擦り付けてくる。まあ、嬉しいから止めはしない。さとり様は呆れているけど。

「いい匂いだねー。今日の朝ごはん何ー？」

「味噌汁と焼き鮭とえのきとほうれんそうの和え物です」

「おー、the和食ウ」

こいし様は献立を聞くと嬉しそうに口笛を吹く。

地霊殿の朝ごはんはいつも和食なんですけどね。

こいし様が抱きついたまんまお盆を運び終え、茶を入れ、席に着く。

こいし様もすぐすごと自分の席に着く。こいし様はちよっぴり残念そうだ。いっそ、僕の膝に招こうか。そんなことしたらさとり様に怒られるからやらないけど。

全員が席ついたのを確認して、手を合わせる。

そして声をそろえて、

「いただきます」

こうして、地霊殿のいつもの1日がスタートするのだった。